

## 十八世紀英国における農耕詩

---

海 老 澤 豊

---

十八世紀の英国において様々な詩歌のジャンルが発展を遂げたことはよく知られているが、とりわけ興味深いのは古代ローマの詩人ウェルギリウス (Publius Vergilius Maro, 70-19B. C.) の『農耕詩』 (*Georgica*, 29B. C.) を模範として書かれた一群の長編詩であろう。農耕詩とは農事全般 (田園で営まれるあらゆる労働) に関わる専門的かつ具体的な知識や情報を伝授するとともに、美しい自然や田園で繰り広げられる様々な人間の営みを描写することを目的としたジャンルであり、ドライデン (John Dryden, 1631-1700) が 1697 年にかなり自由な英訳を発表して以来、後の詩人たちは競うようにして英国化された農耕詩を生み出していったのである。やがて詩人たちは農耕詩の枠組や表現を借りながらも、主題を農事以外のものにまで広げていき、実に様々な人間の営みをこのジャンルで表現していったが、いわゆるロマン派の詩人たちが現われてくるにつれて勢いを失っていく。つまり農耕詩というジャンルに則った作品が書かれたのは、事実上十八世紀に限定されるわけである。

チョーカーは農耕詩が十八世紀の英国で流行した理由として次の三点を挙げている。まず共和制から帝政へと移行した時代のローマと十八世紀初頭のイングランドの政治的状況が似通っていたこと、つまり清教徒革命、チャールズ一世の処刑、王政復古と続き、1688 年の名誉革命によって終止符を打つ

ことになった国内の混乱を体験してきた英国人にとって、永続性と反映を歌い上げたウェルギリウスの理念は本能的に共感をおぼえるものであった。次に文明化の危うさに気づき始めていた当時の英国人は、自らの労働によって世界を維持しようと試みる『農耕詩』の世界に一種の規範を読み取ったこと。<sup>1</sup>最後に『農耕詩』は「意義深く有益だと思われる人生観を提示していた」ために、詩人たちは「この形式によって実に様々な経験に対する解釈に達することができた」こと。<sup>2</sup>ドゥーディはチャーカーのこのような意見をほぼ認めながら、『農耕詩』が読者の対象として設定したのは少なからぬ教養と閑暇を持ち合わせた自作農、すなわち英国人が理想とするカントリー・ジェントルマンであり、そのために『農耕詩』が英国の読者に魅力的に移ったのだと少々穿った説を唱えている。さらにドゥーディは農耕詩という形式は詩人自らが作り出す規則以外にはいかなる規制もない「自由な形式」であって、十八世紀の詩人たちは農耕詩の多様性と汲めども尽かぬ豊かさに価値を見出したのだと述べている。<sup>3</sup>本稿ではこれらの意見を踏まえつつ、農耕詩というジャンルの性格について概観する。

### (1) 英国風農耕詩の成立：ドライデン、 アディソン、フィリップス

そもそも原典たるウェルギリウスの『農耕詩』が書かれた理由は、うち続くローマの内乱によって荒れ果てた国土を復興し、長期間に渡った戦乱で喪失感に襲われていたローマ市民を鼓舞するためであった。四巻からなる『農耕詩』は、それぞれ農業、牧畜、果樹栽培、養蜂に関する知識の伝授に当てられており、また内乱を収めた帝政ローマの初代皇帝アウグストゥスに対する賛美を中心に、祖国の復興を願う愛国的な詩行に満ち溢れている。ドライデンの英訳から『農耕詩』の末尾を引く。<sup>4</sup>

Thus have I sung of fields, and flocks, and trees,  
And of the waxen work of labouring bees;  
While mighty Caesar, thundering from afar,  
Seeks on Euphrates' banks the spoil of war;  
With conquering arms asserts his country's cause,  
With arts of peace the willing people draws;  
On the glad earth the golden age renews,

And his great father's path to heaven pursues; (IV. 807-14)

(こうして私は、畑、羊、果樹について歌ってきた / また労働する  
蜜蜂たちの蠟細工についても / 強大なアウグストゥスは、遠くから  
雷鳴を響かせ / ユーフラテスの岸辺で戦利品を得んとする / 敵を征  
服する武器を振るって祖国の大義を主張し / 平和の技をもって煩を  
厭わぬ人々を惹きつける / うるわしき大地の上に黄金時代を甦らせ  
/ 尊父カエサルの道を天上にまで追い求める)

ドライデンはそれ以前に発表された他人の英訳を最大限に活用するとともに、2188 行しかない原詩に対して 3149 行の訳詩をつけるなど、逐語訳というよりもむしろ原典を思うがままにアレンジした別個の作品、言わば英国化された農耕詩を作り上げ、その後の詩人たちに大きな影響を及ぼすことになる。

そしてこの翻訳に付されたアディソン (Joseph Addison, 1672-1719) の「農耕詩に関するエッセイ」(“An Essay on the Georgics,” 1697) は、英国における農耕詩の方向性や伝統を確立した重要な論文である。<sup>5</sup> まずアディソンは農耕詩を「快い衣装をまとい、詩歌のあらゆる美や修飾で飾り立てた、農事に関わる知識の一部」であると定義し、さらに語り手については「農事に関わる教示は、農民らしい素朴さではなく、詩人らしい歌いぶりで表現されるべき」であり、また倫理的な観想ばかりでは読者が飽きてしまうので、「快く、しかも主題と無関係ではない脱線」をふんだんに取り入れるべきだと論じる。アディソンの主張を簡潔に言えば、農耕詩は読者に知識を伝授するという教訓的な詩行を中心にしながらも、同時に読者の興味を引くために描写的な詩行で時には脱線することも必要だというものである。またアディソン自身は明確な意識をもって述べたとは思えないのだが、ウェルギリウスは「取るに足らない教訓を一種の崇高さで表現し、優美な雰囲気を湛えながら土くれを砕き、糞尿を撒き散らす」と述べ、農耕詩が崇高な表現形式によって瑣末な主題を描くという疑似英雄詩に至る可能性を持っていることを示唆している。ともあれアディソンの農耕詩論は後に続く詩人たちに理論的な支柱を与えることになり、教訓を詩的な表現や描写で修飾すること、読者の興味を引くために自然描写などの脱線を取り入れること、さらには瑣末な主題を高遠な形式で描くことなど、ウェルギリウスやドライデンの作品から帰納的に引き出した種々の規則を示したのである。

ドライデンの英訳とアディソンのエッセイを踏まえながら英国風農耕詩のあ

りかたを決定づけたのが、ジョン・フィリップス (John Philips, 1676-1709) の二巻からなる『林檎酒』(*The Cyder*, 1708) である。<sup>6</sup> フィリップスはイングランド中西部、ウェールズと国境を接するヘリフォード出身の詩人で、そのあたりにかつて存在したという古い国シルリア (Siluria) の栄華を偲びつつ、この地方特産の林檎酒の製造や交易にまつわる農耕詩を発表した。彼自身は王党派寄りであったけれども、ミルトンの作品のパロディを得意にした作風で知られ、そのために『林檎酒』にはミルトンから採ったと思われる語彙や表現が至るところで見られる。ドライデンは『農耕詩』を英訳する際に選んだ形式はヒロイック・カプレットであったが、フィリップスは『林檎酒』の文体にミルトンに倣ったブランク・ヴァースを用い、それ以降英国の農耕詩は若干の例外を除いて無韻で書かれることになる。またフィリップスが故郷のヘリフォードシャーを作品の舞台に選び、ウェルギリウスの原典に見られる古代ローマ的な色彩を払拭したことによって、農耕詩は完全に英国化されるとともに、郷土色をふんだんに取り入れることになったのである。まず『林檎酒』の冒頭を引く。

What Soil the Apple loves, what Care is due  
 To Orchats, timeliest when to press the Fruits,  
 Thy Gift, Pomona, in Miltonian Verse  
 Adventrous I presume to sing; of Verse  
 Nor skill'd nor studious; But my Native Soil  
 Invites me, and the Theme as yet unsung.  
 Ye Ariconian Knights, and fairest Dames,  
 To whom propitious Heav'n these Blessings grants,  
 Attend my Lays; nor hence disdain to learn,  
 How Nature's Gift may be improv'd by Art. ( I . 1-10)

(どんな土壌を林檎が好み、どんな世話が適するか / ポーモーナよ、  
 汝の贈物たる果実をいつごろ絞れば / 最適なのか、大胆にもミルトン風の韻律で / 私は果樹園主たちに歌おうとする、その韻文は / 巧みでも注意深くもないが、私の故郷の土壌が / 未だ歌われたことのない主題が、私を誘うのだ。// アリコニウムの騎士と麗しき貴婦人たちよ / 好意ある天は汝らに対してこの恵みを授けるのだが / 我が歌に耳を貸したまえ、これから自然の贈物が / 技術で改良される様

を無視せずに学びたまえ)

フィリップスはこの詩で果樹園主を主たる読者として想定し、自然を技術によって征服するために、土地の選び方や改良法に始まり、林檎の植え方や育て方、接木の方法や害虫を駆除する方法に至るまで、林檎酒製造に関わる有益かつ詳細な知識を彼らに伝授するという体裁を取っているが、実際に果樹園主がこの韻文から知識を得ようとしたとは考えにくい。おそらくこの詩の真の読者はここでアリコニウム（現在のヘリフォード付近で四世紀前半に鉄の精錬で栄えた街を指す）の騎士や貴婦人と呼ばれる自らは林檎酒製造に手を染めない上流階級に他ならないであろう。語り手の微に入り細を穿つような忠告は、形式上の読者として想定されている果樹園主にしてみれば既知の不要な戯言に過ぎないかもしれないが、上流階級の知的好奇心を満足させるという意味においては有益なのである。またこれらの知識は散文で容易に得られるものばかりであるが、フィリップスは、アディソンが示したように、無味乾燥な教訓を詩的な表現で包み込んで彩りを添えたとともに、地震によるアリコニウムの崩壊を描いた崇高な描写、喫煙の愉しみを説く箇所や、顕微鏡を通して見た害虫の作り出す微小な世界の様子などを適宜挿入することによって読者の関心を持続しようと心を砕いている。さらにこれらの詩行の底に流れているのは、故郷のヘリフォードシャー、ひいては英国を称える熱き思いである。

...where-e'er the British spread

Triumphant Banners, or their Fame has reach'd  
Diffusive, to the utmost Bounds of this  
Wide Universe, Silurian Cyder borne  
Shall please all Tasts, and triumph o'er the Vine. (II. 665-9)

(...どこで英国人が勝利の御旗を / 翻そうとも、また英国の名声が広まり、この広大な / 世界の最果ての領域にまで達しようとも / シルリアの地で生み出された林檎酒は / 万人の味覚を満足させ、葡萄酒に勝利するであろう)

ここで英国の軍事的な世界制覇と林檎酒の味覚による世界制覇（特にフランスに対する優位）がほぼ同一のレベルで語られていることに注意したい。フィ

リップスの描く平和な果樹園が成立するためには、英国が諸外国の脅威を退けて強国としての立場を確固たるものにすると同時に、交易によって世界の隅々にまで英国の文化を行き渡らせることが前提になっている。最初に述べたように農耕詩とは詩人が戦乱によって荒れ果てた国家の復興を願って、いわば鉄の時代に黄金時代の復活を希って書かれるのが定石である。つまり祖国の繁栄と安寧を希求する愛国的な態度こそが農耕詩を生み出す根本的な動機となっているのである。

ドライデンの英訳を発端に、アディソンのエッセイを理論的支柱として書かれた、フィリップスの『林檎酒』は英国風農耕詩の典型的な模範となった。その特徴を要約してみる。(a)ある特定の分野に関する実践的かつ詳細な知識や情報を読者に伝授するとともに、風景描写や物語風の挿話で脱線することによって読者を楽しませる。(b)固有の産物や故事来歴、あるいは古典神話への言及を通じて、特定の土地を賛美する。しかも最終的には英国全体に対する賛美や君主制に対する共感を表明する。(c)文体はしばしば叙事詩風の荘厳な表現や語句を用いるが、卑近な対象を崇高な表現で描くという手法を逆手にとって、パロディ的な効果を狙うことも少なくない。ミルトンの影響を受けたラテン語系の語彙や構文を好み、基本的にブランク・ヴァースの形式で書かれる。(d)専門知識を持った詩人が無知な読者を啓蒙するという見せかけの構成を持つが、実際には詩人と同じ教養を備えた知識人階級に共感を与えるような語り口と内容を持つ。これ以降農耕詩を書こうとする十八世紀英国の詩人たちは、フィリップスの提示した模範にある時は接近しつつも、またある時は離反しながら、独自の農耕詩を生み出そうと苦心することになる。彼らが残した英国風農耕詩は主だったものだけでも十を越えるので、主題別に分類しながら個々に考察していきたい。

## (2) 狩猟詩：ポープ、ゲイ、サマヴィル

ここでは数ある農耕詩の中でも特に狩猟に焦点を当てた一群の「狩猟詩」(Cynegetic)を取り上げる。そもそもウェルギリウスの『農耕詩』は主に農耕や牧畜といった生産的な面をもっぱら描いているのだが、第三巻に狩猟に触れた部分があり、また伝染病によって鳥たちが空から落ちてくるという一節(546-7行)は英国の狩猟詩でも様々な変化をつけて盛んに模倣された。ポープ(Alexander Pope, 1688-1744)の『ウィンザーの森』(*Windsor Forest*)と、ジョ

ン・ゲイ (John Gay, 1685-1732) の『田園の狩り』(*The Rural Sports*) は、い  
 ずれも 1713 年にユトレヒト協約の締結を祝って書かれた狩猟詩であり、ス  
 ペイン継承戦争の終結とともに訪れた平和な雰囲気と愛国心が全篇に満ちあふ  
 れている。<sup>7</sup> もっとも『ウィンザーの森』は「君主の座にして詩神の座」(At  
 once the Monarch's and the Muse's Seats, l.2) であるこの地を牧歌的に歌い上げな  
 がら、ウィンザーに縁の深い歴代の英国君主にまつわる様々な挿話や「川尽  
 くし」(各地の様々な河川を挙げながらテムズ川をその最上位に置く) を中心  
 に描き、鳥撃ちや魚釣りなどの狩猟はむしろアディソンの言う「脱線」にあ  
 たる。それに対してゲイの『田園の狩り』は、都会生活に倦み果てた語り手  
 が安らぎと癒しを求めて田園を訪れるという体裁になっており、第一巻は釣  
 りに、第二巻は兎狩りと鳥撃ちにまるまるあてられている。ゲイの作品はど  
 れも軽妙で風刺を利かせたものばかりだが、『田園の狩り』にもその傾向は顕  
 著で、例えば語り手は魚を欺く毛針を作る技を披露しながら、これを男を惑  
 わす女性に例えるなど、あくまで都会人の娯楽としての狩猟を描いている。

ウィリアム・サマヴィル (William Somerville, 1675-1742) の『狩猟』(*The  
 Chase*, 1735) は狩猟詩の中でも質量ともに傑出した作品である。<sup>8</sup> ウォリック  
 シャーに地所を持つ貴紳階級の出で、若い頃には狩猟に明け暮れたと自ら告  
 白しているサマヴィルは、この詩に付した序文の中で、狩猟とは貴紳の「気  
 高い娯楽」にして「愉快で罪のない愉しみ」であり、古代においては「偉大  
 な英雄たちの訓練」とされたし、健康増進に役立つ上に精神修養にもなると  
 述べて、狩猟の特権性や効用をことさらに強調している。この作品の中でサ  
 マヴィルが自らの体験から蘊蓄を傾ける狩猟には、兎狩り、鹿狩り、狐狩り、  
 川獺狩りがあり、さらに読者を愉しませる目的でインド皇帝の狩り、エチオ  
 ピアの豹狩り、アラブの猪狩りが描かれている。そもそも英国において狩猟  
 は狩猟法による制限もあって古くから貴族階級に独占されてきた娯楽であり、  
 サマヴィルが想定する読者も狩猟を許されている貴族階級に他ならない。

Ye vigorous youths, by smiling Fortune blest,  
 With large demesnes, heredity wealth,  
 Heap'd copious by your wise forefather's care,  
 Hear and attend! While I the means reveal  
 To enjoy those pleasures, for the weak too strong,  
 Too costly for the poor ... (l. 103-8)

(汝ら活気に満ちた若者よ、微笑む幸運によって / 広大な土地を、  
賢明なる先祖の配慮によって / ずっしりと貯えた世襲の財産を恵ま  
れた者よ / 注意して聞くがいい！ 虚弱な者には激しすぎ / 貧しい者  
には高価すぎる、この快樂を愉しむ術を / 私が開陳する間に...)

サマヴィルは古代の狩猟と近代の狩猟の最大の相違点は獵犬の使い方にあると断言した後に、現代の目から見れば過酷とも残忍とも思われるような態度で、その養育と訓練の方法についてかなりの詩行を費やして詳細に訓辞を垂れるのだが、獵犬の群れを人間社会、特に軍隊になぞらえる描写がかなり目につく。つまり主人の絶対的な命令によって獵犬たちは死をも恐れずに敵に向かっていくことを求められるのであり、これは貴紳階級たる指揮官の命令によって兵士たちが突撃していく様を思わせずにはいられない。『狩獵』におけるサマヴィルの本当の目的は、狩猟を通して英国の若い貴紳階級を鍛錬することにあるのだ。

Thy hunter-train, in cheerful green array'd,  
(A band undaunted, and inured to toils,  
Shall compass thee around, die at thy feet,  
Or hew thy passage through the embattled foe,  
And clear thy way to fame; inspired by thee  
The nobler chase of glory shall pursue  
Through fire, and smoke, and blood, and fields of death. ( I . 25-31)

(汝の狩人の群れは、華やかな緑の衣をまとって / (隠することのない、苦勞に慣れた軍勢だ) / 汝の周囲を取り囲み、汝の足元で倒れるだろう / あるいは武装した敵の只中に汝の針路を切り開いて / 汝の名声への道を拓くのだ。汝に鼓舞されて / 栄光を求める気高い狩獵は突き進むだろう / 火や、硝煙や、血の海や、死に満ちた戦場を掻い潜って)

サマヴィルが狩獵に関する教示を受ける読者すなわち貴紳階級は、平時においては国を繁榮させ、有事には侵略者に対して国土を守るという使命がある。そのためには日頃から心身を鍛えておかねばならず、従って狩獵こそが彼らにと



っての労働にあたる。その意味において『狩猟』は農耕詩の理念を備えた作品に他ならないのである。

### (3) 交易詩：ダイヤー、グレインジャー

フィリップスの『林檎酒』ではっきりと現われていたように、英国における農耕詩には諸外国との交易がしばしば描かれている。もっともこれは大英帝国の威信を背景にした膨張主義の一端であり、あくまでも英国を中心に据えた植民地間のネットワークを前提とした交易であることは確かである。ジョン・ダイヤー (John Dyer, 1699-1757) の『羊毛』(*The Fleece*, 1757) は、「羊の世話や、機織りの労働や、交易の手練」(The care of sheep, the labours of the loom, / And arts of trade..., I. 1-2) を主題にした農耕詩であるが、その大部分は英国と他の国々を結びつける交易の重要性をもっぱら説いている。<sup>9</sup>

But chief by numbers of industrious hands  
 A nation's wealth is counted: numbers raise  
 Warm emulation: where that virtue dwells,  
 There will be traffick's seat; there will she build  
 Her rich emporium. Hence, ye happy swains,  
 With hospitality inflame your breast,  
 And emulation: the whole world receive,  
 And with their arts, their virtues, deck your isle.  
 Each clime, each sea, the spacious orb of each,  
 Shall join their various stores, and amply feed  
 The mighty brotherhood; while ye proceed,  
 Active and enterprising, or to teach  
 The stream a naval course, or till the wild,  
 Or drain the fen, or stretch the long canal,  
 Or plough the fertile billows of the deep. (III. 531-45)

(だが国の富というものは主に勤勉な働き手の / 数によって算定されるのだ、その数が増えれば / 熱い競争が生じる、その美徳が宿るところには / 交易の中心地ができる、そこに国は豊かな産業の / 中

心地を築き上げるのだ。だから、幸福な民よ / 他人を遇する心と、競い合う心で、汝らの胸を / 燃やすがいい。あらゆる世界の民を受け入れよ / 彼らの技術や、彼らの美德で、汝らの島を飾るのだ / 各々の風土、各々の海、各々の広大な地域が / その様々な宝物を一つにまとめ、強い同胞愛を / 十分に育むことになる。その一方で汝らは / 活発に、危険を厭わずに進み、川に海へと至る / 水路を教えてやるがいい、また耕地を耕す方法や / 沼地を灌漑する方法、運河を長く伸ばす方法 / 大海原の肥沃な波を切って進む方法を授けよ)

このダイヤーの忠告が英国の都市を中心にした一大貿易圏の構築を目指していることは明白で、確かに本国と植民地が相補的な関係であることを匂わせてはいるものの、あくまでも富が集中するのは英国本国であり、英国人が植民地の住民に授ける様々な技術は、作物の生産性を高め、それを本国へ能率的に運搬する手段を押しつけているに過ぎない。何より「同胞愛」という言葉に象徴されているように、ダイヤーがほのめかしているのは植民地の英国化であり英国国王を頂点とする帝国の形成なのである。ここでいう交易とは搾取の別名に他ならない。

ジェイムズ・グレインジャー (James Grainger, 1721-66) の『砂糖黍』(*The Sugar Cane*, 1764) は、西インド諸島のひとつセント・クリストファー島における砂糖黍栽培を主題とした風変わりな農耕詩である。<sup>10</sup> 医師として数年をこの島で過ごしたグレインジャーは自らの体験を踏まえながら、黒人奴隷を使って大規模な砂糖黍プランテーションを経営する農園主に対して、砂糖黍の栽培法、ラム酒の製造法、市場で商品を高く売る手段、さらに黒人奴隷の扱い方まで至れり尽せりの伝授を行っている。またその合間には英国の人々には物珍しいであろうセント・クリストファー島の動植物や地形・天候などに関する「脱線」を挿入しているが、グレインジャーは各々の対象について病的と思われるほど詳細な注を施しており、まるでこの島の百科全書を編もうと目論んでいるかのようである。『砂糖黍』は様々な興味深い問題を提供する作品であるが、ここでは交易という面に焦点を合わせてみたい。

Nor, beauteous only shows the cultured soil,  
From this cool station. No less charms the eye

That wild interminable waste of waves:  
 While on the horizon's farthest verge are seen  
 Islands of different shape, and different size;  
 While sail-clad ships, with their sweet produce fraught,  
 Swell on the straining sight; while near yon rock,  
 On which ten thousand wings with ceaseless clang  
 Their airies build, a water spout descends,  
 And shakes mid ocean; and while there below,  
 That town, embowered in the different shade  
 Of tamarinds, panspans, and papaws, o'er which  
 A double Iris throws her painted arch,  
 Shows commerce toiling in each crowded street,  
 And each throng'd street with limpid currents lav'd. (III. 538-52)

(この涼しい農場からは、耕作された土地だけが / 美しく見えるのではない。劣らず目を魅了するのは / あの絶え間なく寄せては返す荒々しい大海原だ / その水平線のはるか彼方の縁に見えるのは / ひとつひとつが異なった形や大きさをした島々だ / また帆を膨らませて、甘美な産物を満載した船団が / 視界に広がり、思わず目を見張る。手前の岩礁には / 数え切れぬ翼が途切れることなくわめきながら / 巣を作っているのだが、海水の噴流が襲いかかり / 海の只中を揺さぶるのだ。あちらに視線を落とせば / タマリンドや、パンспанや、ポボウなど / 種々雑多な木陰にこんもりと包まれた街があつて / その上には二重の虹が七色の弓を投じており / 混み合う通りで、澄んだ潮流に洗われている / 混雑した通りで、交易が汗を流す様を見せている)

まるで高台から眼下の様々な自然を歌う眺望詩のように、語り手はセント・クリストファー島の野趣あふれる風景を次々と描いていく。一見すると単なる牧歌的な自然描写のように思われるが、海の上には砂糖やラム酒を本国へ輸送する大船団が帆走しており、馥郁たる果樹で覆われた町の中でも交易という人間の営みが行われている。労働によって繁栄を維持する街、これこそが農耕詩における擬似的な楽園に他ならない。またこの詩行は自然をある程度まで飼い馴

らし、黒人奴隷を含めた労働者たちを監督する、支配者の高処から見下ろした視点で書かれていることは明白である。この視点は島の自然や労働者を眺めていても、その実は本国の方向を見ているに違いない。本国と植民地を結ぶ接点はこのような視点であり、またひたすらに植民地の富を本国へ移送する交易に他ならない。

いったい英国の農耕詩は程度の軽重こそあれ、このような立場の偏った交易を重視する傾向を持っているが、それは世界の至るところに次々と植民地を獲得していった十八世紀英国の繁栄を映したものであると同時に、農耕詩というジャンルの性質にも密接に関わっている。すなわちウエルギリウスの『農耕詩』が初代皇帝アウグストゥスを頂点とした帝政ローマの繁栄を願うために書かれたように、農耕詩とはもともと全面的に支配者階級の側に立った発言で成り立っており、知識を備えた語り手は無知な読者に対して命令形で教えを授け、労働と技術によって自然を征服し黄金時代の復活を目指すための詩なのである。

#### (4) パロディ：スウィフト、ゲイ

既に述べたようにアディソンの「農耕詩論」には、高遠な形式で瑣末な主題を描くという疑似英雄詩への接近を促すような一節があり、このパロディ的な効果を強調した作品にジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745) の「街の驟雨の情景」(“Description of a City Shower”, 1710) がある。この詩は『農耕詩』に現われる挿話の一つ、天候の変化を様々な兆候によって見極める方法を題材にして、「魚の目が疼くのは、驟雨が近づいている前兆で / 古傷がずきずきし、虫歯が激しく痛むのも同様」(A coming Show'r your shooting Corns presage, / Old Aches throb, your hollow Tooth will rage. ll. 1-10) などと十八世紀初頭のロンドンの情景を面白おかしく描いたものである。<sup>11</sup>

またジョン・ゲイ (John Gay, 1685-1732) の『トリヴィア、すなわちロンドン街路歩行術』(*Trivia, or The Art of Walking the Streets of London*, 1716) は、地方から上京してきたばかりの徒弟やお針子に向けて都会で無事に暮らす方法を伝授するという体裁をとった農耕詩の一変形である。語り手は三叉路を司る女神トリヴィアに導かれながらロンドンの様々な街路を辿り、町を歩く際の服装、生活必需品を購入する場所、夜間に外出することの危険などを事細かに語っていく。実にもっともらしく、また実にくだらない忠告を語り手は倦むことなく

説き続けていくのだが、ここでゲイが描こうとしているのは路上で遭遇する様々な危険であると同時に商業都市ロンドンの活気に溢れた雰囲気である。そして語り手の忠告にはパロディ的な効果を狙って古典や神話に対する言及が付け加えられることも少なくない。次の引用で語り手は街路の安全な渡り方について指南している。

Thy Foot will slide upon the miry Stone,  
 And passing Coaches crush thy tortur'd Bone,  
 Or Wheels enclose the Road; on either Hand  
 Pent round with Perils, in the midst you stand,  
 And call for Aid in vain; the Coachman swears,  
 And Carmen drive, unmindful of thy Prayers.  
 Where wilt thou turn? ah! whither wilt thou fly?  
 On ev'ry side the pressing Spokes are nigh.  
 So Sailors, while Charybdis's Gulph they shun,  
 Amaz'd, on Scylla's craggy Dangers run. (Ⅲ. 175-84)

(汝は泥だらけの敷石の上で足を取られて / 通過する馬車が汝の捻った骨を粉砕してしまう / あるいは車輪が道を塞いでしまい、右も左も / あまさず危険に閉じ込められて、真中に君は立ち / 助けを求めても無駄なこと、御者は悪態をつき / 荷馬車も止まらず、汝の嘆願など斟酌しない / 何処へ向かうか？ ああ！ どちらへ逃げればよいか？ / 四方八方から押し寄せるスポークが迫ってくる / あたかも水夫が、カリュブデスの渦を逃れた途端 / スキュラの危険な岩に突進して驚愕することし)

言うまでもなくこれはオデュッセウスが航海中に遭遇した二匹の怪物に触れたものだが、街路で両側を馬車に塞がれた状態の例えにしてはあまりに仰々しすぎる。しかしゲイが狙っているのはこの落差から生じるおかしさであり、同じことは雨に降られた人々が軒下を取ろうと争う際に、三叉路でオイディプスが知らずとは言え父親と道を争って刺殺してしまったことを、読者に対する戒めとして説く箇所にも見られる。またここで注意したいのは、『トリヴィア』の読者として想定されているのは地方からロンドンに来たばかりの徒弟やお針子

ということになっているが、彼らがこのような古典への言及を解するとは信じがたく、従ってゲイが真の読者として念頭に置いているのは一定の知識や教養を備えた有産階級であることが判明する。

何度も繰り返してきたように英国における農耕詩は、本来は素人であるはずの詩人がその道の玄人である読者に様々な知識や情報を伝授する（例えば畑仕事をしたこともない詩人が農夫に対して作物の栽培法を教える）という表面的には歪んだ構造を持っている。しかし当時の読者層という問題から考えても詩人が措定している読者は実際には詩歌など読むはずもなく、英国の農耕詩はあくまでも真の読者である中流・上流階級を愉しませるために書かれたということは明らかであり、またそれゆえに英国風の農耕詩は存在価値を持っていたと言えるだろう。

#### (5) 農耕詩の終焉：メイソン、クーパー

十八世紀英国における農耕詩はこれまで触れてきた作品の他にも、ケント州のホップ栽培を歌ったクリストファー・スマート（Christopher Smart, 1722-71）の『ホップ農園』(*The Hop Garden*, 1752)、十八世紀中葉における最も重要な出版業者ロバート・ドヅリー（Robert Dodsley, 1703-64）の実作『農業』(*Agriculture*, 1753)、またジョン・アームストロング（John Armstrong, 1709-79）の『健康維持法』(*The Art of Preserving Health*, 1744) など実に多岐にわたる展開を見せている。しかし十八世紀も後半になると農耕詩というジャンルは次第にその勢いを失っていく。その理由はいくつか考えられるが、まず特権の立場にある詩人が無知な読者に教示を授けるという構造、言い換えれば農耕詩の教訓的な性格が詩人と読者双方にとって違和感のあるものになってしまったことが挙げられる。「純粋な詩歌」を目指した十八世紀中葉におけるオードの隆盛や、七十年代に巻き起こったバラッドや中世趣味の流行は、いずれもドライデン・ポープ・ジョンソンを頂点とするいわゆる擬古典主義、古典を下敷きにした教訓と風刺に対する不満が顕在化したものと考えられるが、農耕詩の衰退も同じ文脈で跡づけることができよう。ただし農耕詩は教訓的な性格と同時に挿話や自然描写で読者を愉しませるという性格（アディソンの言う脱線）も兼ね備えたジャンルであり、絵画と庭園に関する膨大な注釈を付した農耕詩『英国の庭園』(*The English Garden*, 1771-81) を書いたウィリアム・メイソン（William Mason, 1725-97）は、この作品の中で説教臭い農耕詩を書く難しさにつ

いて次のように洩らしている。<sup>12</sup>

But precepts tire, and this fastidious Age  
Rejects the strain didactic: Try we then  
In lovelier Narrative the truths to veil  
We dare not dictate ... (IV. 49-52)

(だが訓示は退屈で、好みの喧しい当世は / 教訓の調べを拒絶する。  
だから我々は / 心地よい物語で真実をくるむとしよう / 教示することなく...)

また農耕詩は専制君主制を擁護し祖国の発展と安寧を願うという公的な性格を持ったジャンルであるけれども、いわゆる感受性の時代に至ってむしろ私的な声を重視する詩人が徐々に増えていったことも農耕詩が書かれなくなった一つの理由であろう。ウィリアム・クーパー (William Cowper, 1731-1800) はもともと教訓詩を得意にしていた詩人であり、代表作の『課題』 (*The Task*, 1785) は椅子の発展を辿った箇所やキュウリ栽培の方法を語る部分などを含む、概ね農耕詩の流れを汲む作品といってもよい。<sup>13</sup> 堆肥作りを描いた一節を引く。

Warily therefore, and with prudent heed  
He seeks a favor'd spot. That where he builds  
Th' agglomerated pile, his frame may front  
The sun's meridian disk, and at the back  
Enjoy close shelter, wall, or reeds, or hedge  
Impervious to the wind. First he bids spread  
Dry fern or litter'd hay, that may imbibe  
Th' ascending damps; ... (III. 470-7)

(従って用心深く、慎重に注意を払いながら / 彼はお誂え向きの場所を探す。そこに馬糞を積む / 建造物を建てるのだ、枠組が子午線上にある / 太陽面と向かい合うように、また背後には / 風を通さぬ隙間のない覆いや、壁や、葺き藁や / 垣根に与れるように。最初に彼は立ち昇る湿気を / 吸収するように、乾燥した羊糞や敷いてあつ

た/干草を広げよと命じる...)

堆肥を発酵させるための箱作りがミルトン風の擬縮された表現で具体的に細かく描かれているけれども、ここで注意したいのは農耕詩では通例二人称あるいは命令形で書かれるべきところが、三人称を動作主としている点である。つまりクーパーは玄人たる語り手が素人たる読者に知識を授けるという農耕詩の図式を無視しており、結果は同じかもしれないが、教訓的な意図が非常に薄いことは明白であろう。もともと『課題』という作品は隣人の女性の求めに応じて書き始められた作品であり、読者を想定して書くという観念が希薄であることも事実である。また精神疾患に絶えず悩まされていたクーパー自身が投影されたとおぼしき語り手は、無用の人間という烙印を何とか押しのけようと必死に抗弁する立場にあり、もはや高い所からしかつめらしく訓示を行うという行為がそぐわないものになっている。この引用は教訓というよりもむしろ語り手が果たすべき課題を描いた挿話と考えられる。

このように十八世紀における英国風農耕詩は、ドライデンの英訳とアディソンのエッセイを基にしたフィリップスの『林檎酒』に始まり、様々な発展を遂げながらも十八世紀の後半にはその役割を次第に失っていった。しかし否定されたのは農耕詩の教訓的な部分であり、描写的な部分についてはなおもその命脈を後世につなげていった。アディソンのいう脱線は長編詩を志す詩人にとって決して無視することのできない重要な観念として引き継がれていくことになる。そして農耕詩は十八世紀という時代を見事に映したジャンルとして今後も読み継がれていくべきものなのである。

#### 注

- 1 John Chalker, *The English Georgic: A Study in the Development of a Form* (London: Routledge and Kegan Paul, 1969) 10-14.
- 2 Chalker 2.
- 3 Margaret Anne Doody, *The Daring Muse: Augustan Poetry Reconsidered* (Cambridge: Cambridge University Press, 1985) 109-18.
- 4 *The Poems of John Dryden*, ed. James Kinsley, 4 vols (Oxford: Clarendon Press, 1958) 本稿における『農耕詩』の引用はすべてドライデンの英訳に拠る。
- 5 Joseph Addison, "An Essay on the Georgics" in *The Works of John Dryden*, vol.V (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1987) 137-53.



- 6 *The Poems of John Philips*, ed. M. G. Lloyd (Oxford: Basil Blackwell, 1927) 本稿におけるフィリップスの引用はすべてこの版に拠る。また拙稿「ジョン・フィリップスの『林檎酒』：十八世紀英国における農耕詩の系譜(1)」『新潟産業大学人文学部紀要』8 (1998) : 35-49 でアディソンの「農耕詩論」とフィリップスの『林檎酒』について詳しく論じている。
- 7 *The Poems of Alexander Pope, A One Volume Edition of The Twickenham Pope*, ed. John Butt (London: Routledge, 1989) 本稿におけるポープの引用はすべてこの版に拠る。*John Gay: Poetry and Prose*, eds. Vinton A. Dearing & Charles E. Beckwith, 2 vols (Oxford: Clarendon Press, 1974) 本稿におけるゲイの引用はすべてこの版に拠る。またゲイの作品については拙稿「ジョン・ゲイの『田園の狩り』における3つの声」『ケイオスモス』6 (1995) : 32-46 及び「ロンドンの街路を安全に歩く方法：ジョン・ゲイのトリヴィア」『彷徨の詩学：十八世紀イギリス詩からヒーニーへ』（金星堂, 1997) 1-26. において詳しく論じている。
- 8 *The Poetical Works of Joseph Addison; Gay's Fables; and Somerville's Chase*, ed. George Gilfillan (Edinburgh: James Nichol, 1859) 本稿におけるサマヴィルに引用はすべてこの版に拠る。また拙稿「ウィリアム・サマヴィルの『狩猟』：十八世紀英国における農耕詩の系譜(2)」『新潟産業大学人文学部紀要』9 (1999) 23-38 において『狩猟』を詳しく論じている。
- 9 John Dyer, *The Fleece: A Poem in Four Books* (London: R. and J. Dodsley, 1757) 本稿におけるダイヤーの引用はすべてこの版に拠る。
- 10 John Gilmore, *The Poetics of Empire: A Study of James Grainger's The Sugar Cane* (London: The Athlone Press, 2000) 本稿におけるグレインジャーの引用はすべてこの版に拠る。また拙稿「ジェイムズ・グレインジャーの『砂糖黍』：十八世紀英国における農耕詩の系譜(3)」『新潟産業大学人文学部紀要』11 (2000) : 1-15 において『砂糖黍』を詳しく論じている。
- 11 *The Poems of Jonathan Swift*, ed. Harold Williams, 3 vols (Oxford: Clarendon Press, 1958) 本稿におけるスウィフトの引用はすべてこの版に拠る。
- 12 *Poems by William Mason, M. A.*, 3 vols (York, 1796) 本稿におけるメイソンの引用はすべてこの版に拠る。
- 13 *The Poems of William Cowper*, eds. John D. Baird & Charles Ryskamp, 3 vols (Oxford: Clarendon Press, 1980-95) 本稿におけるクーパーの引用はすべてこの版に拠る。また『課題』については拙稿「クーパーの課題」『ケイオスモス』4 (1993) : 21-9 で詳しく論じている。

なお本稿は2000年12月2日に立教英米文学会で発表したレジユメをもとに再構成したものである。

## English Georgics in the Eighteenth Century

Yutaka EBISAWA

Since Dryden translated *Georgics* by Vergilius in 1697 and Addison wrote "An Essay on the Georgics" as a preface to Dryden's edition, *Georgics* had been imitated and developed in a various way. *Georgics* is a didactic poem that a narrator gives a practical and minute information on agriculture, livestock, orchard and bees to a reader. *Georgics* is a descriptive poem that a narrator depicts a beautiful scenery or a pleasing episode to enjoy a reader at the same time. And *Georgics* is a patriotic poem that a narrator praises Augustus the first Roman emperor and hopes to regain the Golden Age. Addison insists that Georgic should be "some part of the Science of Husbandry put into a pleasing Dress, and set off with all the Beauties and Embellishments of Poetry", and poets who imitate Georgic should "relieve the Subjects with a Moral Reflection, or let it rest a while for the sake of a pleasant and pertinent digression".

After Dryden and Addison, John Philips wrote the first English Georgic *The Cyder* (1708) in blank verse, which established the style, manner and structure of English Georgic as follows: (a) A narrator teaches readers a practical and minute information on a certain field, and enjoys them with natural description and a narrative episode. (b) The narrator praises the local history, products and inhabitants, and expresses his sympathy with England and monarchy. (c) The style is often solemn and dignified, but sometimes parodical that the narrator describes a trivial thing with a lofty manner. (d) On the surface the narrator of wide knowledge speaks to the ignorant reader, but in reality the reader is implied to be of the intellectuals that can appreciate the imitation of Classics and myths.

William Somerville's *The Chase* (1735) is a Georgic on hunting (cynegetic), whose real purpose is to train the young peers by way of hunting a hare, deer, a fox and an otter in case that they should fight bravely against invaders. John Dyer asserts in *The Fleece* (1757) that England and many countries all over the world should unite through the trade of fleece peacefully, and James Grainger depicts in *The Sugar Cane* (1764) that St. Christopher in the West Indies enjoys paradise-like nature and "commerce toiling in each crowded street". Both poets believe that

the trade is the way to peace and prosperity of England. John Gay instructs the reader how to walk the streets of London safely in *Trivia* (1716) along with many parodical imitations of Classics, but it is an atmosphere of commercial metropolis that impresses the reader's mind.

In the late Eighteenth Century, a vogue of Georgic in England had gradually been declining. William Mason confesses in *The English Garden* (1771-81) that it is difficult to write a Georgic because the contemporary readers reject didacticism and want to read more narratives. A Georgic has a public voice that insists the good of monarchy and wishes the country's welfare, but William Cowper whispers in a private voice the pleasure of growing a cucumber in *The Task* (1785) that has the style and manner of the Georgic. Didacticism and a public voice of Georgic might become out of vogue, but description and narrative in Georgic survived the Age of Romanticism and after.